原始ジャイナ教における在家の宗教生活

奥田清明

原始ジャイナ教とは成立史的にみて Digambara と Śvetāmbara の二派が分離した西暦八十年頃までを指すが、私たちの利用できる原始ジャイナ教研究上の texts は當然その頃までに成立した texts ということになる。そこで Siddhānta の中から利用價値のあるものを選び出すと、一應妥當なものは次の諸本となるであろう。すなわち諸 Aṅga と Vavahāra, Dasāo, Kappa の三つの Cheya-sutta と Uttarajjhāyā, Dasaveyāliya の二つの Mūla-sutta 等がそれに該當すると考えられる。ところでこれら原始ジャイナ教聖典の中にも新古の二層が存在することを見落してはならず、Āyāraṅga の第一篇、Sūyagaḍaṅga 第一篇、それに Uttarajjhāyā, Dasaveyāliya は古層に屬し他の諸聖典は一應新層に屬すると考えられる。古層に屬する諸聖典は内容的に言ってもつぱら出家生活への言及が中心となつており、在家生活への言及は殆んどなく、あつてもそれは「家に住することは苦であり、出家生活は苦でない」「家に住することは束縛であり、出家生活は解脱である」等といつた在家生活に對する非難や批判であるにすぎない。一方新層の texts においては古層のそれに比べると出家生活への言及は比較的少く、逆に在家生活の描寫が多い。そしてその代表的な text は Uvāsaga-dasāo である。そこで以下主としてこの Aṅga を手掛りとしながら、在家者に要請せられている宗教生活の諸德目について考察を加えたいと思う。インド人の宗教的態度の特徴の一つに「法」を聽く態度の强さを上げることができるが、ジャイナ教の場合においても一般の在家者はその說法に觸れ、それに滿足し贊同すると、他の聞法者たちが歸つて行つた後もたゞ一人殘つて、出家者に對してジャイナ教の教えに對する淨信 saddhā を表明し、pañcâṇuvvaya と satta-sikkhā-vvaya とからなる十二の在家のつとめを duvālasa-vihaṃ gihi-dhammaṃ まもることを宣誓する。この宣誓 vaya は個人個人によつてその内容・程度が異るが、その宣誓がおわると、出家の方から vaya に對する說明がなされ、それを在家者が聽き理解し、再び "vandai" "namaṃsai,, と言つて歸依の態度を表明し、duvālasa-viha gihi-dhamma を守ることをあらためて宣誓することによつて、名實ともに在家信者となることができる。このようにして在俗信者となつた者に、以下のような宗教的實踐が要請される。〔布施する paḍilābhemāṇe viharai 〕など、すなわち飲食物 asaṇa-pāṇa-khāima-sāima 衣服 vattha 毛布 kambala 鉢 paḍiggaha 箒 pāyapuñchaṇa 椅子 pīḍha 板 phalaga 寢臺 sijja-santhāra 香料 osaha 藥 bhesajja を出家に施與することが要請される。この場合これらの施物は清淨でなければならない。又同時に施者も受者も清淨でなければならない。その與え方はまず喜んで迎える。そして乞食者のまわりを三度右廻りし、稱讚、敬禮する。次いで臺所へ行き、施物を持つてきて與える。出家が受けとつたことを喜ぶ、といつたやり方でなされる。ところで施與の功能は次世によき家に生ぜしめる力をもつ點にある。しかしそれには deva-loga への生とか siddhi の獲得とか言

つた純宗教的な力はない。たゞ施與は在家者のジャイナ教への saddhā を示す外的行爲であり、教徒としての義務であるにすぎず、純宗教的な實踐德目とは考えられていないのである。㈡**学習** sajjhāya すなわち靈魂・非靈魂 jivājiva と duvālasa-viha gihi-dhamma の內容を知ることである。これらに關する知識を獲得し維持する方法は法話 dhamma-kahā を聽くことと及び夜の熟思 dhamma-jāgariyā である。なお出家の學習との違いは根本的には聖典を讀むか讀まないかという點にある。**宣誓** vaya **遵守**、これは入信の時に出家者の前で誓い宣言した sāvaga-dhamma (gihi-dhamma) を日常生活において守ることである。當時その sāvaga-dhamma は十二項目より成つていたが、これら全部の項目を遵守する必要性はそれ程嚴格ではなかつたのではないかと考えられる。このことは Uvāsaga-dasāo において四學處戒が述べられていないことや Uttarajjhāyā, Nāyādhamma-kahāo 他に digvrata を破壞する發言があること等によつて知られる。㈣**斎戒** posaha-uvavāsa **遵守**、在家信者は特定の日に齋戒場 posaha-sālā へ行き、そこを清掃し、大、小便をするにふさわしい場所をみつける。齋戒場に darbha 草を敷く。そしてその上に坐り、斷食して瞑想する。以上がいわゆる在俗信者の行うべき宗教的實踐德目であるが、同時に富裕であること、社會的威信を具えていること、美しく、彼を喜ばせることを知る妻をもつこと、榮えている友人や家族や親族・郎黨をもつことといつた世俗的に價値あるものと見なされているものを保持することも又稱讚される。このようにこの時期に在俗信者に對して望まれていた宗教生活のあり方は俗との完全な離別ではなく、むしろ俗的な生活の充分な承認の上に立つた宗教的德目の實踐であつたのである。

ところで先のような世俗生活を否定しない宗教生活を經驗したものに對しては次の段階として世俗から隔離した所での宗教生活が理想的行爲として要請されている。すなわち更に隱棲してひたすら修行に生きることをすゝめる。隱棲は息子が家督を繼げる年齢に達したのを契機としてなされるが、それは老齢に達したからという理由によるのではなく、自分が未だ充分 duvālasa-viha gihi-dhamma を守つていないという反省に基ずいている。穩棲とは繼嗣に家督をゆずり、自分は郊外にある同族の posaha-sālā に住し、ひたすら修行に勵む生活をすることであるが、かゝる行爲は地位も名譽も妻子財產をも捨てることであり、俗との絕緣である。この期に行われる實踐德目は普通は齋戒を徹底して行うことである。しかし實踐はこれのみではない。すなわちある時期から sāvaga の paḍimā を實修する。paḍimā は十一の項目からなつているが、修習者は五年半を費してこれを修する。paḍimā は一種の tapas であるからこの行の修習によつて肉體は弱り萎れ血管が見える狀態となる。しかしなお活動・力・勇氣等が殘つている以上、それらを無くすために更に死ぬまで續ける苦行、すなわち斷食を行うのである。他に兩時期を通じて信者に要求されている宗教的實踐及び態度には贖罪 pāyacchitta が、又謙虛であること vinaya がある。pāyacchitta は聞法に行く時や禍を犯した時、死に臨む時等に行われる。vinaya を態度としてもつことが力說されるのは、けだし謙虛（柔順）でないならば眞面目にジャイナ教の修行に打ち込めないからである。以上在家信者に要請されている宗教的實踐の諸德目を見てきたが、これらの德目を正しく實踐してはじめて、目指す deva-loga に生れ、更に siddha になりうるというのである。